

## 学生街の〈効用〉

読売新聞記者 中西 茂

「最近の学生は、昼ご飯を階段に座って食べる」

早稲田大学の島田陽一学生部長（当時）から、そんな話を聞いて、「学生街の店が苦しくなるはずだ」と思ったのが、このコラムの出発点になっている。

島田さんの話を確かめるため、お昼どきの母校に出かけてみた。たまたま、階段での食事は発見できなかった。生協の outlet で弁当を買った学生を〈尾行〉してみた。どこで食べようかと、かなり建物の中をうろろしたあげく、戸外のベンチで一人食べることにしたようだった。トイレで食事をするといった話もあるぐらいだから、〈孤食〉は珍しいことではないのかもしれない。

いまどきのキャンパスには、ごく当たり前にコンビニエンスストアもある。コンビニで買えるものでお昼を済ませるのが日常であって、学生のライフスタイルのなかに、周辺の商店街とつながる行動があまり組み込まれていないのである。

学生街の代表格のように見られる早稲田も大きく変わっ

た。特に、大隈講堂前から都電の早稲田駅につながる大隈通りには、筆者が過ごした三〇年前の店は、コンパの会場となる「金城庵」以外、ほとんど残っていない。後継者がいないからなのだろうか、軒のテントだけがそのまま残るのもの悲しい。都電の駅の先には、女優室井滋の代わりに一日だけウエーターをやった喫茶店があったはずだが、見つけれなかった。

地下鉄早稲田駅につながる南門通りには、経営者が変わったものの、店のつくりや看板はそのままにしている喫茶店「ぶらたん」が残る。ここに入り浸っていたために、某新聞に「いまどきの学生は喫茶店でだべってばかりいる」という記事が掲載されたこともある。

創業五〇年、すでに経営者が傘寿を迎えたラーメン店「稲穂」も健在だ。いまだにタンメンは四百五十円、ラーメン



軒のテントだけで閉店した店も目立つ早大隈通り。

は四百四十  
円という価  
格を守って  
いる。卒業  
生が訪れる  
ことも多い  
が、現役学  
生にも十分  
愛されてい  
るようだ。

ただ、当然、後継者はいない。

通りを少し入ったところにあった「早稲田茶房」は、かつて作家が何人も出入りした場所だが、なくなつて久しい。いまでは正確な場所もわからなくなつてしまつた。

\*

個人的な思い出話もずいぶんつづつてしまつたが、いくつもの大学の学生街を回つて感じたのは、やはり、街は学生を育てるということだった。学生に街と縁がなくとも、街を歩くことで、学生街を再発見した学生たちがあちこちにいたからである。その点を、大学関係者にはもう一度、再認識していただきたい。フィールドワークの場として、



早大南門通りには昔ながらの店もまだ残る。

街を題材に教育を考へることをもつとやつていいと思つて、地方都市にとって、商店街の振興策一つをとつても地方の大学の必須科目ではないだろうか。

本誌「大学と学生」は今号で廃刊になる。縁あつて、風前の灯だつた雑誌にコラムを書くことになつたが、消えゆく学生街と雑誌

を重ね合わせて考へざるをえなかつた。一見、無駄に見えるものも、実は染みつくような効用があるものだ。学生街を考へることは、大学の存在をとらえ直すことにつながると思う。

学生と街を語るなら、京都にも足を運びたかつたし、他にも登場していい街はあるはずだ。紹介しきれなかつたのは、ひとえに筆者の情報不足していたため、お許しいただきたい。



瀬戸内国際芸術祭の開催中、毎日、情報発信をした香川大生ら。商店街の活性化でもひと役買うことができるか。